外国旅行の効用

三枝　佐枝子

特別旅行好きというわけではないのだが、私は仕事の関係で旅行する機会が多かった。雑誌の講演会が日本全国の主な都市で行われたためもあって、県庁の所在地はほとんどと言ってよいくらい訪問している。また外国旅行も、この十年くらいの間に、三回する機会があった。旅行というものは、私のようなおっくうがり屋には、出かけるまではいやなものだが、行ってみると、やっぱり来てよかったと、必ず思うものである。旅をしてはじめて、今まで本で読んだり人に聞いたりして知っていたものを、自分の目で見てたしかめることができる。また、新しい人間関係の中に自分を置いて、思いがけない経験をするというのも、旅ならではの貴重な体験ということができよう。

はじめて外国へ行ったのは、一九六〇年だから、今から十年前である。アメリカの国務省の招待で、二カ月間アメリカ各地を見て歩いた。この旅で私が痛感したのは、ひと言で言えばアメリカは実に大きく、そして、各州によってそれぞれ何と違う国だろうということであった。

こんなことに今さら気がつくなんてナンセンスと笑われるかも知れない。しかし、これは私がアメリカ合衆国を一周して、はじめて本当に知ったことなのであった。黒人問題にしても、私がヒューマニズムの立場から考えて、何で平等に扱えないのだろうと不思議に思っていたことが、実はなかなかむずかしい問題を含んでいることを、この目で見て知った。

中でも私が肌でこの問題のむずかしさを感じたのは、ニューオルリンズの黒人指導者を訪問し、その人につれられて黒人専用のレストランに入った時のことである。白人の仲間であるはずの日本の女が、自分たちのレストランへ入って来たのを知った黒人客たちの、憎悪とも侮蔑ともつかない鋭いまなざしを、私は忘れることはできない。

この旅行の終り頃、私はちょうど日本での安保騒動にぶっつかり、連日の新聞に大きな活字で書かれる祖国の情況をその相手国において読んで、何ともいえない不安な、複雑な心境を味わった。これも二度とめぐりあえない貴重な旅の体験であった。

第二の外国旅行は中華人民共和国であった。第一の旅行と同じく、ここも私は一人旅だった。それはちょうど文化大革命が起る直前であったが、私たち旅行者にとっては不愉快なことは何一つなく、楽しく充実した旅であった。

私はここで、中国の女性たちと子供たちのモーレツなエネルギーに圧倒された。毛沢東主席いってんばりの中国でも、年輩者や中年以上の男たちの表情には、何か割りきれない陰翳がうかがわれたが、女性たちは皆一様に

目をかがやかせ、子供たちもまた祖国のよい守り手になろうと、ひたすら願っている様子がうかがわれた。託児所の子供たちさえ、「私たちは毛おじさまのよい子になって、米帝国主義とソビエト修正主義と闘います」と歌いながらお遊戯をしているのである。

私はこの旅で、中国には犬が一匹もいないことに気がついた。蝿がいないことは聞いていたが、犬がいないことは知らなかった。不思議に思ってきくと、

「犬というものはお金持の暇人が愛玩用に飼うか、ドロ棒よけに飼うものだったけれども、いまの中国にはお金持も暇人もドロ棒もいないので、犬の存在理由がなくなった」との答えが返って来た。「まことにごもっともで……」というよりほかはない。

第三の外国旅行は、昨年春農業視察の団体に加わって、ヨーロッパ一周旅行をしたことである。私にとって初めての団体旅行であり、私の知らない農業関係の視察であるので、今までとはまた違った興味があった。

この旅行で私は、ヨーロッパ農業が農作物、乳製品の過剰生産によって、すでに行きづまりの状態にあることをつくづくと知らされた。日本も米の生産過剰に悩んでいるが、欧州ではEECの副委員長マンスホルト氏の大胆な提案によって、この難関を突破しようとの努力が積極的に行われている。この状態を見て私は、日本における農業政策が、果して現在のようなやり方でよいのだろうかと、考えさせられたものであった。

今度の旅で私が感じさせられたもう一つのことは、日本の国力が九年前アメリカの帰りにヨーロッパに立寄った時と、比較にならないほど高く評価されていることだった。円は大手をふって通用し、欧州の街には、日本人観光客がみちみちていた。

さて、旅は思いがけない人間関係をつくりあげるが、私の場合もそうであった。第一の旅で私は、ワシントンのホテルで、やはり米国務省の招待で訪米された川端康成先生とご一緒になった。先生とはそれまでも度々お目にかかってはいたが、私にとって先生は、近寄りがたいこわい方であった。しかし、ワシントンでの先生は、やさしく、若々しい興味にみちみちておられた。私は先生のお供をしてドライブしたり、ゴーゴー・バアへ行ったりした。異国の若者たちに囲まれてこの白髪の文豪は、実にリラックスして嬉しそうにしておられるのを私は見た。これは私にとって新しい発見だった。

留学中の有吉佐和子さんにニューヨークでお会いしたのも、この旅であった。渡米前にはいろいろな問題でナーバスになっておられた有吉さんは、ニューヨークでは一女子学生として、発溂と生活しておられた。彼女が日本女性にはめずらしいほどの自由人であり、国際人であることを私はこの時感じたが、それは後に中国へ行って、そこでの有吉さんの評価を聞いて、さらに確信を深めた次第であった。

中国の旅では、北京のホテルで、偶然来あわせた日本の出版社の社長さん方と一緒になり、自由の国日本のよさを喜びあい、ふだん覗き見ることのできないその方々の心にふれることができて楽しかった。

しかし、今年の欧州旅行では、私は同行の日本人男性の多くに失望した。日本ではそれぞれ社会的地位のある方々が、旅行先きでは、何とお粗末に見えたことだろう。そもそも団体旅行とは、何と人間を矮小化させてしまうものだろうと、私はつくづく思った。気に入った男性と一緒に団体旅行をするな、とは私の今度の旅で得た教訓の一つである。